メイドエンジェル
明日香
ASUKA
神崎美宙
表紙イラスト：ひなぐま
二次元ぷち文庫
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『メイドエンジェル明日香』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

神崎美宙

表紙／ひなくま

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

明日香（あすか）

ロケットランチャー片手に宇宙からの侵略者と闘い、日本の平和を守るメイドさん。

レイラ

地球侵略にやってきた敵組織の妖艶な女幹部。

今日も世の中は至極平穏無事。
天気は快晴。歩道には家族連れや若いカップル、サラリーマンからお年寄りまで大勢の老若男女が溢れていた。休日ということもあり駅前の大通りは大小様々な車が忙しなく行き来し、普段以上に賑わっている。
「くだらん……実にくだらんっ!!」
もうすぐ太陽は西へと傾き今日も何事もない一日が終わるはずだった。
ほんの数分前までは。
駅ビルの頂上から街並みを見下ろしていた男が不機嫌そうに腕を振り上げる。
すると落雷のような閃光と轟音が街の喧騒を一瞬にして呑み込んだ。人々は驚きのあまりその場に倒れこみ、乗用車は次々に玉突き事故を起こして停車する。
「ウハハハハハッ！　愉快、愉快、実に愉快だ」
野太い笑い声が辺りに響き渡った。
衝突した自動車から白煙が上がり、人々の叫び声や泣き声が入り混じる。しばらくすると通報を受けた警察官達が集まってきた。さらに自衛隊の装甲車の姿まで見える。
人々を安全な場所へと必死に誘導する国家機関を嘲るように大男は何度も腕を振り上げた。その度に地震のように地面が揺れ、眩い光が走り、騒ぎと混乱は大きくなるばかりだった。

「ククク……やはり下等生物はこうでなくてはな……」
黒い奇抜なデザインのマントを翻し、男は満足げに顎(あご)を撫でている。身長は二メートル以上あり、人間というよりは獣のような身体つきをしていた。深く被った帽子のようなものせいで顔は見えないが、威圧感たっぷりの風貌と謎の力を持っている。
「どれ、もっと近くで泣き喚く虫けら共の姿を見るとするか」
薄笑いで歪んでいた男の顔が急に後ろを振り向く。
地上で騒ぎ立てるサイレンや拡声機の音に紛れて、すぐ近くで鳴っているカンカンカンという音。階段を駆け上がってくるようにそれは段々と近づいてくる。
「んっ、なんだ……?」
男が視線を向けた先、ビルの屋上へと繋がる扉が勢いよく開け放たれた。
「アナタが……きゃ～～っ!?」
飛び込んできたのは小柄な少女とその悲鳴。
「誰だ貴様は!?」
一瞬身構えた大男は怪訝(けげん)そうな表情で乱入者を睨みつける。
「い、痛ぁ～いっ……擦りむいちゃった……」
鋭い眼光を気にすることもなく、少女は膝を抱えて座り込んだ。腰まで伸びたピンク色の髪がサラサラと前方に流れる。ロングのストレートヘアを飾る白いカチューシャもよく

似合う。

「ふん……小娘がこんな所に何の用だ？」

緊張感のない声に男は少し苛立ちながら質問を繰り返す。

「はっ⁉　アナタですねっ、侵略者さんは！」

思い出したように顔を上げる少女。大きくてつぶらな碧眼はビー玉のように澄んでいて、目尻に浮かんだ涙の粒が水晶のようにキラっと光る。

長く細い眉を吊り上げ、ぷりっと潤んだ唇をへの字に結んで大男を見つめた。

「何だこいつは……この星の知的生命体の知能レベルはこんなもんなのか」

呆れたようにため息をついた。

「あ、私のことをバカにしましたね！」

さっき転んだ時に汚れた黒いミニスカートの裾を叩きながら、ムキーっと白い歯を噛みしめる。

黒いワンピースの上から清潔感溢れる白のエプロンのシワを伸ばし、首元の赤いタイを直す。

「頭の悪そうな格好をしておいて何を怒ってる？」

「あー！　この衣装のことまでバカにしましたねー⁉」

同年代の少女達よりも大きい胸元の膨らみがぷるんと弾んだ。だけど大きさ以上に御椀

型に突き出した曲線の美しさは魅力的で。小柄だけど全体的に細身でスタイルも良く見える。

「アナタ、この衣装を知らないんですか⁉」

スカートから伸びる太股も健康的に引き締まっていて、お尻の方もプリプリしていることが想像できた。

鼻筋が整っていてやや童顔ながらそれも魅力の一つの美少女。コロコロと表情が変わり見ているだけで楽しい。しかし一般男性が抱くような感情を、獣男が感じるはずもなかった。

「衣装なんてどうでもいい。俺に歯向かうなら女子供でも容赦せんぞ」

射抜くような鋭い眼しと威圧を孕んだ視線を少女にぶつける。

「望むところですっ！　私だって、許しませんよ‼」

それなのに美少女は怯むどころか不敵にも大男を睨み返した。男でも戦慄するほどの眼光を目の前しても宝石のような碧眼は輝きをさらに強める。

「生意気な女はな……好かんのだよっ！」

二人の間には十メートルほどの距離があったが、その間合いを男は一瞬にしてゼロにしていた。

いきなり毛だらけの拳が少女の顔をめがけて振り下ろされる。

「なっ……？」

何の手応えもなく空振った腕。
一撃必殺の暗殺拳をあっさりと簡単に避けられ、男は驚きの声を上げて背後に立っていた美少女の方に振り返る。
「急に何するんですか、危ないじゃないですか⁉」
するりと男の攻撃をかわした少女は頬を膨らませた。
「ちっ、このガキ！」
ムキになって腕を振り回すが、当たるどころか掠(かす)りもしない。
美少女が軽やかに攻撃を避ける度に短いスカートの裾が翻り、中のパンティがチラチラと覗く。それが恥ずかしいのか少し頬は上気し、最小限の動きだけで大男の腕を回避していった。
さすがに目の前の少女が只者ではないことを感じたらしい。
「ど、どういうことだ……？」
ある程度の間合いを保ち、男は乱れた呼吸を整えている。
「さあ、覚悟してください」
自信に満ち溢れた表情を浮かべながら少女は言い放つ。
「覚悟……だと？」
少女の発した言葉の意味が分からず、首を傾げる獣男。

しかしメイド娘はいつの間に取り出したのか、その衣装には似つかわしくもない筒状の銃器を肩に担いでいた。黒光りする鉄製のロケットランチャーの先端に装填された鏃(やじり)のような形をした弾頭が謎の男の方を向く。

「爆破します!!」

「なっ!?　何をっ……」

少女はアイアンサイトで狙いを定め、グリップを握っている方とは反対の手で引き金を引いた。目標は慌てて逃げようとするが遅すぎた。

発射機から飛び出したロケット弾は見事に男の顔面に命中。派手な爆発音と共にその巨体が吹き飛んだ。

「ぐっ……バカなッ……こんな奴の情報はなかったぞっ」

悔しげに声を絞り出す男に、次々に弾頭が襲いかかる。

「貴様、何者だ!?」

攻撃から逃げるように隣のビルへと飛び移りながら男が叫ぶ。

「私は、地球の平和のためにご奉仕するメイドの明日香(あすか)です！」

高らかに宣言する美少女。

「ち、明日香とやら……覚えていろよ！」

そう捨てゼリフを吐いて逃げ出す男に、容赦のないロケラン攻撃は続いた。

今、地球は謎の組織からの侵略を受けていた。
突然に現れた武装集団。初めはどこかのテロリストの仕業だと報道されたが、すぐにそれは真実ではないと分かった。
世界の主要都市に同時に攻撃を展開し、各国の軍隊や国連軍を次々に撃破していくほどの戦闘力を持ったテロ組織などない。
人間離れした容姿に科学では説明のできない能力を持った侵略者。地球とは異なる進化の過程を辿った別銀河からやってきたとしか説明できなかった。だから人々は彼らのことを「怪人」と呼んでいる。
「はあ、疲れちゃった……」
侵略者が現れてからというもの、当然のように日本にも激しい攻撃が連日行われていた。自衛隊や警察が必死に応戦するものの、結局人命救助を優先するために積極的な防衛戦を繰り広げることはできない。
「お疲れ様、お茶でも入れようか？」
首都を占拠されてしまう国が出てくる中、日本は首都はもちろん地方に至るまでほとんど怪人の侵攻を許していなかった。それはこの非常時を乗りきるために結成された、特別防衛隊の活躍が大きい。

（は、恥ずかしいよぉ……）

元々短かったスカートは怪人の手によって無残に切り刻まれ、裾は膝上二十センチオーバーという超ミニ状態で白い太股の大部分が露わになっていた。タイツとの間の絶対領域の面積は普段の倍以上に広がっている。ただ立っているだけでもショーツが見えそうになるほど短いが、両手は後ろで縛られているせいで隠すこともできない。

「さあ、お前達の大好きなメイドのエロエロショータイムが始まるわよ！」

レイラが観衆に向かって声を上げるとざわめきは大きくなる。好奇と困惑が混じりあった複雑な視線がいくつも明日香の身体の上を這っていく。

見られるということはメイド喫茶で働く少女にとっては日常茶飯事だった。だけどお店でご主人様達に見られるのとは全然状況が違う。

それに少女の羞恥心を煽るのは下半身だけではなかった。エプロンごと胸元の布地もばっさりと切り込みが入れられ、ブラジャーも取り去られてしまったせいで乳果実のミルクのような乳肌がむき出しになっている。辛うじて先端は布地が覆ってくれているが、ツンと小さな隆起が浮かび上がりその位置までは隠しきれていなかった。

それだけではなく腹部や袖などあちこちが切り刻まれ、透き通るような白い素肌が外気に晒されていた。

（はぅ……見られてるぅ……）

ミニ試読みSS！スタート

騒ぎを聞きつけたのか見世物になってしまった明日香の周りには、さらに多くの野次馬達が集まってくる。地球を侵略している謎の組織に捕らわれた少女に対して同情の念が強いのか、観衆は遠巻きに眺めているばかりだった。

だけどその中には少女の扇情的な姿に反応したいやらしい視線も混ざっている。

（こんな格好で外を歩くなんてただの変態さんじゃない……）

信じられないような光景が目の前に広がり、頭がクラクラとしてきた。恥ずかしくて顔が燃えるように熱く全身に汗が滲(にじ)み、心臓の音が聞こえてくるくらい大きくなっている。

「あぅっ……」

背中を一筋の汗がツツっと滴り落ち、火照った肌の上を冷たい感触が走り震えた。人々の視線を意識すればするほど頭が高熱が出た時のようにボーっとしてしまい思考が働かない。

露出した乳房が歩くスピードに合わせて上下に揺れ、微細な刺激にも敏感になっている身体は過剰に反応する。そして蓄積した刺激は徐々に甘い痺れへと変わり、初心な少女を深く困惑させた。

（な、何……何なのこれ……）

半裸状態で観衆の前に立たされていることよりも、胸の奥からじわじわと湧き上がってくる快感が羞恥心をさらに強くする。

「ひゃぁ……ッ！」
いつの間にか硬く尖った乳首が不意にメイド服の裏地と擦れあい、その度に全身に電流が走る。セックスはもちろん自慰の経験すらない少女には、性的な快感はあまりにも刺激的すぎた。
少女の意思とは無関係に陰部からはとくとくと蜜が自然に溢れてきて純白のレースショーツを濡らしている。じわりと湿った薄布が股間に張りついているせいで、超ミニスカートの裾からむき出しになっている太股を恥ずかしげに擦り合わせていた。
「あらあら、感じちゃった？」
「ひぇっ⁉」
レイラの声で我に返る。思考は全身に流れる快楽電流に犯され始めていて、再び激しい羞恥心が襲ってきた。だけどノーブラ状態のせいで些細な振動にも大きめの乳房は反応してぷるぷると形を変え揺れる。両腕は使えず、胸を隠すこともできず、可憐な肢体へと注がれる人々の視線にじっと耐えるしかなかった。
未熟な性感帯を中心に全身を焦がす快感は徐々に意識を支配し始め羞恥を塗りつぶしていく。
「可愛い声ね、好みよ」
「へ、変なこと言わないでくださいっ！」

言葉では慌てて否定したけど、顔から手足の先まで火照っていて熱い。顔が赤くなっているのは、恥ずかしさだけでないことを見抜かれてしまっているようだ。

「みなさーん、この娘は見られて感じる変態でーす。もっと見てあげてくださーい」

紅髪の美女はワザと明日香の羞恥を煽るように大声で見物人達に声をかける。

「ち、違います!! ウソを言わないでくださいッ!」

動揺して首を横に力いっぱい振るが、その振動に合わせて乳房が大きく揺れた。黒いメイド服の切れ目から顔を出した白い乳肉がバウンドして、観衆の視線を一点に集中させる。

「何これ、AVの撮影か?」

「いや、メイドさんが怪人に捕まったみたいだ」

「それにしても可愛いなぁ」

胸から全身に広がる絶妙な刺激は足を震えさせ、吐息には熱が帯びている。瑞々しい唇は微妙に震え、全身の汗腺から一気に汗が吹き出る。

「かわいそうに……酷い目に遭わされるのかしら……」

「おっぱい結構大きいじゃん」

そして瞬間的に股間の疼きが高まり、蜜が大量に溢れた。透明な体液は既にビショ濡れのショーツでは吸い取ることができず、内股を伝い滴り落ちる。両手の動きを封じられた明日香にできるのは必死に脚を閉じ合わせ、蜜汁を漏らしていることを隠すくらいだった。

るメイド少女にお構いなしにガガルは花弁に溜まった蜜を啜った。
「ほら、感じてるんだろ？　遠慮せずに感じていいぞ」
「そ、そんなこと……はぁン……ない、ですっ……」
柔らかそうな頬をリンゴのように真っ赤にして必死に首を横に振るが、身体はなぜか男の指を完全に拒絶することができない。密かに芽生えている感情を押し隠すように唇を噛みしめるが、吐息はどんどん熱を帯びる。
「ふん、口で何と言おうが、愛液はどんどん溢れてくるじゃないか」
鼻で笑うとガガルは長い舌を一気に大淫唇の間に挿し込み膣口を舐め、尖らせた舌先で陰核を転がした。その手馴れた責めは的確に女の欲情のツボを刺激し、処女の明日香は為す術なく肉悦に翻弄された。
「ちゅぷ、じゅる……そろそろ欲しくなってきたんじゃないのか？」
「し、知りませんっ……あぁ、もう舐めないでくださいっ！」
ワザとらしい淫らな水音を立てながら愛蜜を吸い上げられ、少女の羞恥心はさらに掻き立てられる。ガガルの愛撫は激しくて性器を貪り食われるような錯覚に襲われた。
「まあ、いい。もうサービスは終わりだ」
不意にガガルの身体が離れていった。力なく地面にへたり込んだメイド少女は虚ろな表情で怪人を見つめた。

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

「な、何を……」
「ククク、あの時の恨みをやっと晴らせるわ」
高笑いをしながら怪人はズボンを脱ぎ捨て、自慢げに己の逸物を取り出した。突然に目の前に現れた人間離れしたグロテスクな巨根に、明日香は言葉を失い唖然とする。
そもそも男性器を見たのだって今日が初めての少女に、怪人の異常な逸物は刺激が強すぎた。使い込まれた肉棒は墨のように黒く、肉幹は太くて大きくそり返っていた。表面に浮かび上がった血管は力強く脈動し、先端からは透明な液を滴らせ見事にいきり勃った男根の威容は人間の物とは比べ物にならない。
「私に何をするつもりですかっ……」
「あ？　ここまできたらやることは一つしかないだろ？」
密林のように濃い剛毛が生える股間から伸びる肉棒と、その下にぶらさがっている拳よりも大きな肉袋の威圧感は凄まじかった。その迫力に頭はパニックを起こし、状況を上手く整理できない。
「え、ウ、ウソっ……きゃあぁぁッ!!」
凶悪な肉棒に見とれてしまっていたところに、ガガルが覆いかぶさってきた。不意を突かれメイド少女は簡単に組み伏せられてしまう。
「グフフ……もう十分濡れてるし、遠慮なくいくぞ」

大男がこれから何をしようとしているのかを悟り、明日香は背筋が凍る思いだった。慌てて手足をバタつかせ暴れても、肩を地面に押さえつけられてしまい身動きが取れない。
「い、嫌です！　離してくださいッ!!」
はっきりとした拒絶の言葉。しかしそれは牡の嗜虐的な興奮を煽るだけで、近づいてくる肉矛の動きを止めることはできなかった。
「これからが本番だろ？　何を言ってるっ……」
ついに膨張した亀頭の先端と大淫唇が触れあって湿った淫質な音が鳴った。火傷するかと思うほど男根は熱く、先汁で濡れた先端が秘肉にじわじわと食い込んでくる。
「ダ、ダメですっ、お願いだから許してッ!!」
「うるさいぞ、少し黙ってろッ！」
嫌がる少女の華奢（きゃしゃ）な身体を力で押さえつけ、ガガルは腰を前へと突き出していく。亀頭が膣肉の中へとねじ込まれ、凄まじい圧迫感が下腹を襲う。
大量の愛液が溢れているとはいえ、処女の狭い肉壁を太い剛直で掻き分けられ痛みと苦痛で明日香の顔が歪んだ。そしてすぐに先端は薄膜とぶつかり、一旦肉の侵入が止まる。
「はぁはぁ……許して、くださいぃ……やめてぇ……」
「ふん、すぐに気持ちよくしてやるから我慢しとけよ」
瞳を涙いっぱいに潤ませ拒否する少女の細腰が大男の獣のような腕で固定され、一気に

腰を突き立てられた。

「いやぁ、気持ちよくなんか……ンぎぃぃぃぃぃぃ――――――ッ!!」

必死の訴えも虚しくブチッという生々しい音が身体の芯に響き、膜が破ける感覚と激痛で息が止まる。声にならない悲鳴などお構いなく、怒張は乙女の最奥まで突き入れられた。そしてカリで肉壁を削るように引き抜かれる。休む間もなく浅い位置で出し入れが続いた後、すぐに本格的にピストンが始まる。

「はぐっ、い、痛いですっ！　動かないでッ、動かないでぇ!!」

膣壁を異物で満たされたうえに擦られるという未知の感触。誰の侵入も許さなかった秘肉が、今まさに人間でもない化け物に犯されている。

しかも滑稽なほど高速で腰を打ちつけられて膣肉を掻き回され、破瓜の痛みを感じている余裕すら与えてくれない。

「ふむ、中々いい物を持ってるじゃないか」

少女の抵抗が弱まったので、ガガルは少し腰の動きをゆっくりめにシフトしながら口元に下品な笑みを浮かべる。膣の感触を堪能している怪人とは違い、明日香はそれどころではなかった。

「はぁ、くぅっ……あ、あっ、はぁンっ……」

あまりに大きな激情が全身を駆け回り、痛みなのか快感なのか正しく脳が認識しなくな

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/